


女魔王  
鬼畜凌辱CG集

魔王はみんなの慰み者







人間牧場、という場所がある。  
魔王と魔物が世界を支配する  
暗黒の時代、  
人間を虐待するため  
だけに作られた  
呪われた施設。

大量に生産され、生まれた分だけ  
魔物の楽しみ虐殺される人間達の中でも、  
最下層に位置する身分が存在した。



「人うし」と呼ばれる彼らは  
四肢と舌を切り取られ、  
魔物だけでなく  
同じ人間からも鬻り者にされる  
運命であった。

その人うしのオスの檻の中に、  
まばゆいばかりに輝く裸の美女が  
喘ぎ声を上げていた。





青白く輝く美しい髪をかきわけ、  
猛烈な勢いで人うしたちが群がる。

手足を「加工」された彼らは  
性欲を自ら解消することが  
一切できず、

発情期の獣と同じかそれ以上の  
飢餓的性欲に苦しんでいるのだ。





目隠しをしていてもはつきりとその美貌が伺える  
青白色の長髪を備えた裸体は、  
その群れのなかで唯一の女。  
そして、唯一人五体満足の存在だ。

だが、人間ではない。  
その髪の長さは身の丈を超えるほどで、  
魔力の燐光を放っている。

手足には禍々しい黒と赤の螺旋模様が有り、  
一種独特の美をたたえている。

背中には大柄な人うしが乗りかかり、  
どうにかその女を犯そうと  
必死でバランスを取りながら  
うごめいている。



ズプププツ……  
「あ、あうっ……  
あがうううっ……！」  
先走り液で  
ぬとぬとになっている  
人うしのペニスが、  
とうとう美女の体内に挿入された。  
前の穴ではなく、後ろの穴に。

「うへああああ!!」

舌も切り取られて言葉を話すことが  
ままならないその人うしは  
汚らしい快樂の叫びを上げ続けながら  
必死で腰をふる。



「おうっ、おっ、おっ、  
げへえっ!!」  
人外の美女の尻穴に、  
人うしが大量の精液を  
注ぎ込む。

身体を激しく震わせながら  
ただ情欲の滾りを受け入れている  
青髪の可憐な生贄。

彼女の正体を、この場に知るものなど  
一人もいないだろう。





「う……うう……」

目隠しが取り去られ、  
美しい顔があらわになる。  
清い泉のような水色に赤い光が散る瞳。

彼女の名は魔王ジル。  
世界で最強最悪の存在。

人間を虐待するためだけに  
牧場を作った残忍を極める魔王。  
人うしをこんな境遇に墮とした元凶が  
あろうことかその大群の中心で  
自らの身を彼らの獣欲に  
捧げているのだ。

後ろから逆流した精液に隠れたその  
可憐な桃色の秘唇を、新たな人うしが  
挿し貫く。

「か、かは、ああ……」



一回では満足しなかったのだろう、先ほど後ろの穴を堪能したばかりの人うしが再び乗りかかる。

「ひ、ひぐうう……！」

最強の存在にして人類の天敵ともいえる魔王ジルが、最下層の人間に両穴を犯された。

屈辱的な行為を  
目尻に涙を浮かべつつただ受け入れる、  
残忍無比で知られる魔王。

その姿は恐ろしいというよりは  
愛らしくすらあり、被虐の美に満ちている。

瑞々しい尻肉がわななき、  
望まぬ快樂に悶えている。





ジルを犯している人うしが  
ほぼ同時に叫びをあげ、  
最も美しく、最も残忍な  
魔王の中に精を放つ。

絶命するかと思われるほどの快楽が  
人うし達の脳髓を焼き尽くし、  
考えられないほど大量の精液が  
ジルの両穴に注ぎ込まれる。





凌辱は何時間、いや何日経っても  
決して勢いが衰えず、  
ジルは全身を人うしの精液で  
塗り固められたようになっていた。  
すすり泣きながらその雪のように  
透き通った裸身をくねらせるジル。

狂気が宿るその瞳は屈辱と快楽の間を揺れ動き、  
かつての自分と同じ姿の人うし達の劣情を  
さらに刺激する。





この世界の魔人、そしてそれを束ねる魔王は、  
いかなる魔法や魔剣をもってしても  
傷つけることすらできず、  
本来ならば人類には絶対に勝てない相手だ。

しかし一年ほど前、極秘裏かつ入念に仕組まれた  
異次元の力を用いた結界で、  
魔人たちの封印に成功し、  
魔王たるジルもその力すべてを消去された。

不死の彼女を殺すこと自体はできないために、  
精神を完全に破壊すべく、  
人間牧場へ肉穴奴隷として  
投げ込まれたのだ。

人うしは犯している相手が何なのかも知らぬまま、  
人外の美女に凌辱と暴虐の限りを尽くしている。



また別の人うしの  
檻が開けられ、ジルの裸体に  
餓えた雄の群れが殺到する。

手が使えないためにもみしだくことが  
ままならぬ豊かな乳房を、  
その分だけ欲情のこもった舌と唇で  
徹底的に愛撫する。

体の穴という穴はおろか、  
豊かな美髪や膝や肘などの  
陰茎を挟みうる部分、  
胸の谷間や脇、鎖骨のくぼみにまで、  
人うしはペニスを押し当て、こすりつけ、  
快楽をむさぼる。



どぶっ……どぶどぶっ!!

強烈な臭いを放つ  
黄ばんだ精液が、  
ジルの真っ白な肉体を  
染め上げていく。

子宮内に、直腸内に、胃の中に、  
目や鼻、耳の穴にまで、  
こっぴりとした熱い精液は  
侵入し、汚しきる。





百体はくだらない  
檻の中の  
人うしたちが満足する頃には  
ジルの体はこつてりとした精液で  
染め上げられていた。

「かふ…ひどい、臭いだ……  
最低の相手、だな……」

よほど人うしとの強制交尾が堪えるのか、  
涙すらうつつすらと浮かべている  
可憐な魔王。



「んうっ……くうっ……!!」

膣の奥、子宮内にまで、  
直接精液を流し込まれているのが  
はつきりとわかる。

限界を超えてもなおジルを  
犯したくてたまらない人うしたちが、  
精液で汚れ切った身体じゅうに、  
さらに熱い粘液を浴びせる。

「あ、あっ……あああああっ!!」

ジルは下等な人うし達と同時に  
激しく絶頂した。  
膣壁が収縮し、精液をさらに  
飲み込むようにうごめき、  
手や乳房、髪までもを使って  
人うしの精液をさらに搾る。






「まったく……しょうのない……  
奴らだ……」  
だが、ようやく、満足できたぞ……」  
粘液の塊に全身を  
包まれているような状態のジルが、  
艶然と微笑んだ。

泣き叫び、犯されるだけの先ほどまでとは  
うって変わった余裕に満ちたその眼差しには、  
悪戯っぽい表情が浮かんでいる。





「ご苦労、人うしども……楽しかったぞ」

ジルの目が赤く怪しく光る。

同時におびただしい数の魔力の矢が発生し、  
その場にいたすべての人うしを虐殺した。



全ては退屈しのぎの遊びだった。  
魔人達を異次元に封じる結果も、  
魔力を消滅させる秘術も、人間に身をやつしたジルが  
反乱軍に与えたものだ。

魔力消滅の秘術の効果は確かだったが、  
ジルは交わった人間の力を吸いにとって  
自らの魔力に変える能力があるために、  
全くもってどうということもなかった。

ただ君臨するだけの退屈な時間に、ジルは飽きていた。  
だから負けたふり、性奴隷に堕とされたふりをしてやった。  
刺激を求めて、そして人間達を笑顔にしてやるために。

笑顔になった人間達がまた泣き叫ぶのを楽しむために。

次はどうやって苦しめてやろうか……





長すぎるほどの封印の闇から這い出たばかりの自分を  
恐れることすらなく抱いてくれた人間の戦士に拒絶され、  
ただ一人暗黒の亜空間に投げ出されたジル。

魔力の損耗は激しく、器が壊れたような状態だ。

これ以上無理をすれば  
完全消滅する危険性はあったが、  
何もせずにただ消えるよりは一縷の望みに賭ける事にし、  
ジルは全ての魔力と自分の存在の一部すらを消費して、  
空間に亀裂を生じさせた。



「ここは……?」

目が覚めた場所は地下牢だった。

修繕が進むリーザス城の地下、女の子モンスターを捕らえて犯す、娼婦に払う金のいらぬ残酷な慰安所。

「な、何だ……この格好は……!!」

ジルはリボンや可愛いアクセサリーで飾られ、体にだけはボンデージ風の拘束具じみた衣装を着させられている。

「お、可愛い子ちゃんが目エ覚ましたぜ」  
「綺麗な目してんなあ……なんてモンスターかな?」



力が全く入らない。  
人間達に前に伝えた魔力封印の技。  
それがこの拘束衣に使われているせいだ。  
犯される。魔力を取り込む能力も  
おそらくは使えない。

「寝てる間にしっかほぐしておいたから、  
今からぶち込むからね〜」  
「なっ……!」

あまりにも大きい男性器。  
入れたら胃袋まで届きそうだ。  
ジルはその小さな胸を震わせながら、  
目を見開いている。





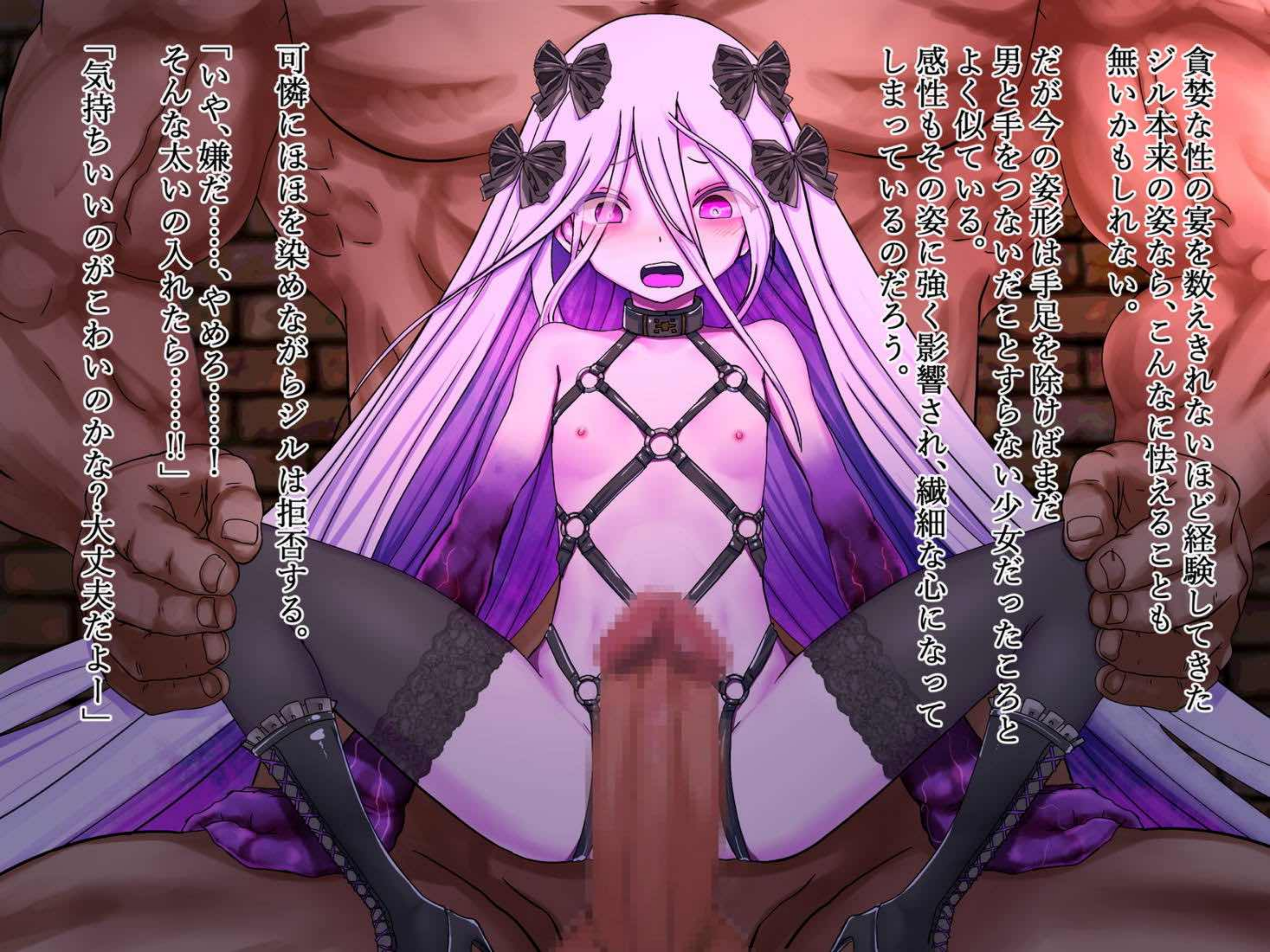
貪婪な性の宴を数えきれないほど経験してきた  
ジル本来の姿なら、こんなに怯えることも  
無いかもしれない。

だが今の姿形は手足を除けばまだ  
男と手をつないだことすらない少女だったころと  
よく似ている。  
感性もその姿に強く影響され、繊細な心になって  
しまっているのだらう。

可憐にほほを染めながらジルは拒否する。

「いや、嫌だ……、やめろ……!!  
そんな太いの入れたら……!!」

「気持ちいいのがこわいのかな?大丈夫だよー」





ずんっ!!

「きゃふううっ!」

「おーすごい、入れただけでイッちやったよこの子、  
かわいいなあ」

拘束衣のせいで巨大なペニスが加える圧力が  
どこにも逃げず、ジルは圧迫感に  
悲鳴を上げる。  
だが、苦痛のそれではなく、  
隠しきれない快楽によるものだ。



激しい動きでジルの軽い身体は大きく上下に揺れる。

「うわーすげえピストンのたびにイキまくってるよー」

「経験自体はありそうなのに、

上手い奴に優しくレイプされたことがなかったんじゃね?」

「ひ、ひぐっ、こ、殺すっ、ころしてや、  
イ、イクううっ!!」

「かわいいねえ……」

「イキまくってる人外マンコに、射精すよっ……!」

「……!!!」



どぶろくどぶろく……!!

「孕めっ……!!孕めええっ!!」

「は、ああ、ああああっ!!」

ジルの小さい膣も子宮も、  
男の巨根から迸る精液で  
汚されていく。





「俺たちのも相手してくれよ、名前  
何ていうの？」

「ジ、ジル……」

巨大なペニス二本の迫力に息をのみながら、  
何故かジルは正直に答えてしまう。



「じゃあジルちゃん、俺らのも気持ちよく  
させてもらおうからね」  
男達はジルのぷにぷにで柔らかいほっぺたに  
鬼頭を押し付けながら  
陰茎を手で扱き始める。



「うっ…ジルちゃんのほっぺ気持ちいいっ!」

「出すよっ、顔にぶっかけるよっ!」

（あ、あっ…ああっ…!!!）



挿入されたままの巨根が再び射精し、  
同時に魔王の顔に熱い精液が飛び散る。

頭がくらくらするような臭いにむせ返りながら、  
ジルも同時に絶頂を迎えていた。



それからの2年間はジルにとって  
全く経験したことのない地獄だった。

男達は女モンスター相手にセックスの経験を  
積みまくっていて、彼女が出会ったことのないレベルの  
セックスの達人だったのだ。

不死の肉体とはいえ、ごく小柄で敏感な少女の肉体に  
昼夜の区別なく快感の楔を打ち込まれ続け、  
何度懇願しても休むことを許されぬ日々。  
隙について脱出するまで、何万回犯され、何十万回  
絶頂を迎えたのか、見当すらつかなかった。





城を脱出したジルがたどり着いたのは  
ぶたばんばらの村だった。  
人間の少女とさして変わらぬほど弱った今の彼女は  
こん棒で身体じゅうを殴られ、無造作に犯され、  
再び性奴隷として犯されていた。

身の丈を越す白く長い髪は交尾の邪魔になるので  
かわいらしい三つ編みにされ、  
今日も夜通し  
その白く小さい尻肉を鷲掴みにされながら犯され続けている。





「ふっ、はっ、あぁっ……!こんな、ぶたみたいなバケモノにつ……!」

「かわいらしいぶうねお前っ、白くてスベスベで、まん〇の締め付けも本当に最高だぶうっ!」

「やめ……ろ……お願い……だっ……」

ばんばらの動きが激しくなる。容赦ないピストン運動で  
ジルの細く小さい身体が激しく揺れる。

「ぐ、う……」

ぽろぽろと涙をこぼしながら屈辱に耐えるジル。



だがその可憐な尻肉も、薄紅色の陰唇も、野性味あふれるぶたばんばらの巨大なペニスをしっかりと受け入れ、ジルの抵抗とは裏腹に交尾の快楽をむさぼっている。

「ぐはは、すげえ気持ちいいぶうっ！いま射精るぶうっ！」

「やめろ……！や、やめてえっ！お願いだからっ……!!」

愛らしいサイズの割れ目がきゅんきゅんと締め、ぶたばんばらの精液を待ち望んでるのがわかる。今出されたら……今出されたらきつと……！





「でるうううっ!!」

「いやああああっ…!!い…い…いくううっ…!!」

ぶたばんばらが小さい魔王の腔内に、  
全身から絞り出すようにして熱い粘液をぶちまける。

ごぶごぶ、というくぐもった水音を立てて、  
ゼリーののような超濃厚なそれが痙攣するジルの身体に  
しみこんでいく。

「うっ、うええ…うああああ…!!」

大人の肉体だった時には一回も見せなかった  
凌辱への悲しみ。  
可愛い顔をくしゃくしゃにしたがら、  
ジルは泣いている。





「ぐうっ……むぐっ……!!」

「ぐひゃひゃ、可愛い口も  
すげえ気持ちいいぶうっ!」

(何て臭い……)

ジルの喉奥までぶたばんばらのペニスが  
遠慮なく押し込まれ、ひどい臭いのする  
先走り液でぬめるそれは

セックスそのもののピストン運動で  
容赦なく小さい肉体を蹂躞する。





どびゅううっ!

「ん~~~~~っ!」

喉の一番奥で口を犯していたぶたばんばらが  
思い切り射精する。  
高濃度の粘液が呼吸を完全にふさぎ、  
ジルは苦しさに身もだえする。

ほぼ同時に股間にさらに精液が射ち込まれる。  
「ん、んっ、んおおっ…!」  
快楽の叫びを上げながら、どくんどくんと  
際限ない射精の快楽にうめくぶたばんばら。





ぶたばんばらの性奴隷の身に墮とされて  
数か月が経ったところ、ジル自身にとっても予想外の  
事態が起こった。

力のほぼ全てを失い、魔王としての資格を喪失したから  
なのだろうが……あろうことか下等なモンスターの子を  
孕まされてしまったらしい。

「や、やめてっ……お腹、苦しいからっ……」  
だが懇願が聞き入れられた事など一度もない。  
ジルは単なる精液便器のようなものであり、  
一切の敬意を払われることはなかった。  
かつて魔王であったところの威厳や不遜さは  
ほぼ完全に砕かれてしまっている。





ごぼごぼっ、ぶびゅっ！

「っ……、あ、ああ、ああ……」

大きくなった子宮に浴びせるように、  
容赦ない膣内射精を食らわされるジル。

大きくなった乳房をぶるぶると震わせ、  
前にせり出した腹を揺らしながら、  
凌辱に心を痛めつけられる。





夜の森、魔王はただ一人で這っている。  
大きなお腹を抱えて、行く当てもなく。  
「う、産みたく……ない……」

だが今の彼女はただの無力な  
女の子モンスターにすぎない。

男の子モンスターに犯されることで孕み、  
またモンスターを産むだけの存在に、  
全ての血の力を失ったジルはなり果てていた。





「や、やだ……誰か……くああああっ！」

陣痛に耐えかね、とうとうジルはいきみだした。  
初産の苦しみが何時間続いただろうか。  
明け方近くに、森の奥でジルは男の子を産み落とした。



その子はほどなくして群れの若いオスに発見されたが、  
ジルの姿はどこにもなかった。  
多くの人間を苦しめ続けた最悪の魔王は、  
今はどこに行くこともできない哀れな逃亡者だった。






人目を避け、森の奥で隠れ暮らしていたジルは、  
巨人デカントに目を付けられ、  
拉致された。

手と足に鎖をぐるぐるに巻かれ、  
股関節が裂けそうなほどに  
両足を限界まで開かされる。

また、犯される……  
その事はわかっていたが、  
あまりの身体のサイズ差に、  
震えが止まらない。





「お願いだ……放して、くれ……」  
泣くのを必死に堪えながら  
デカントに頼むジル。

だがやはりというべきか、その可愛い顔で  
哀願しても、劣情をそそるだけだった。  
もつと泣かせたい、デカントはそう感じ、  
ペニスを激しく勃起させた。



「ひっ……」

ジルが息を呑む。

小柄な彼女の胴体とほぼ変わらないサイズのいきり立った剛直が、やわらかい腹の上に置かれたからだ。

「あ……ああ……」

ジルは怯え切っている。  
無理もない。モンスターが獲物を犯す時に容赦などするはずがない。

そして不死身性だけは残っている  
自分の肉体に、  
こんなものを挿入されたら  
どうなるか。  
死を上回る苦痛が  
待っていることはあきらかだ。



「ぐ、ぐあ、あ……ぐぎいっ！」

恐ろしい悲鳴をあげるジルにかまわず、  
デカントはそのペニスをめりめりと  
ねじ込んでくる。

粘膜と恥骨の結合部が激しく痛み、  
出産のときのように骨と骨をつなげる靭帯が  
開いていく。

ひとつだけ大きな違いを上げるなら、  
膣がひろがらなければならぬサイズが、  
出産の時の5倍はゆうにある、という  
事だろう。

地獄の苦痛がジルを襲い、  
歯を噛み折らんばかりに食いしぼる。







「あっ、あっあ……  
だめ、抜いて、うごか……ないで……」

ジルが涙ながらに頼んでも、挿入の快楽に染まったデカントの意識が、そんなものに気づくはずもない。

引き裂かないように「だけ」注意しながら、ジルをオナホール代わりに悠然と犯し始める。  
「ぐっ、ぐえっ、うええっ……」  
ジルは潰れたような声を上げる。



ばちゅっ！ばちゅんっ！  
ばちゅっ！

本気のピストン運動が始まった。  
1ストローク1メートル以上、  
出入りする物の質量だけで100キロ近くは  
あるだろうその異常な暴虐レイプは、  
ジルと言えども耐えられるものではない。

身体が一番奥が震源の大地震のような  
心臓まで潰れそうなピストン運動を  
受け続け、ジルはその長い自髪を  
激しく揺らしながら  
絶叫を上げ続けている。



「がへえええっ！」

断末魔の如き叫びを上げながら、  
ジルは絶頂する。

同時に噴火そのものの射精が  
妊娠でもあり得ないほどのサイズに、  
彼女の腹を膨らませる。

「う、うぐあつ……あへえっ……」  
理性も意識も全てが灼熱の精液に  
押し流され、ジルは忘我の極みに  
あった。




「あうっ、あうううっ……」  
泣きじゃくるジル。その身体は  
何百リットルもの精液で今にも  
弾けそうだ。  
女体そのものを破壊する勢いの  
巨大ペニスでの凌辱によって、  
彼女はもう完全に屈服していた。

「わたしの……体……  
もう……」

なけなしの魔力で維持している  
手足にヒビが入っているのが  
わかる。  
全てが終わるときは近いようだ。






非道の限りを尽くした代償、  
とは考えなかつた。  
世界はただ強いものが、  
弱いものを食らい虐げる事で  
成り立っているからだ。

ただ自分は本来弱かつたのだと  
いうことを、被虐の快樂の中で  
初めてジルは認識し、その自分を  
受け入れることにした。  
それは魔王としての根本の  
存在理由の消滅を意味する。

まもなく彼女の体は手足から  
崩れ落ち、快樂の絶叫と共に  
滅んでいくだろう。





リセットが魔軍に捕らえられてから  
もう2ヶ月が経つ。  
本来成人男性とすら  
性交が厳しいような  
きわめて小さい体格の彼女だが、  
魔物の獣欲はお構いなしに  
浴びせられ続け、  
凌辱者をより気持ちよくさせるために  
あらゆる手段が講じられた。

その可憐な外見はそのままに、  
媚薬で調教され、全穴が使えるように  
訓練させられ、  
人外サイズのペニスが根元まで入るように、  
腹の中を手術までされている。








「ふんこらやっでんずこすこすするよ、  
きもちいんだあっ○○○○」

デカントのペニスで  
人工的に拡張された膣内と子宮内を  
ゴガンゴガンという音さえ感じるほどに  
凌辱されるリセット。

脳神経がおかしくなるほどの媚薬までもが  
毎日投与されつづけているため、  
酷い苦痛を快楽と誤認識しつつ、  
無惨な叫びを上げる。

「わ、わたしもっ、気持ち、いいよおっ!!」






「ん、んちゅ…はむ…っ」  
リセットは差し出された  
男のモノに  
小さい唇を上手に使って  
懸命に奉仕する。  
生来の真面目な性格が幸いし、  
これ以上ないくらいこの  
テクニシャンとなった  
彼女は、とらえた穴奴隷の中でも  
相当の人気だ。

デカントもゴスゴスと  
彼女の小さい身体全てを  
絶妙な締め付けに喘ぎながら犯している。  
平らかな胸、小さい手足、可愛い顔、そして  
いやらしすぎる性器のギャップがたまらない。





絶頂が近づいている。  
リセットも、回を犯す  
男も、そして後ろの  
デカントも。

薬で判断力が狂っている  
リセットは、  
凌辱者達を喜ばせようと、  
激しく頭をグライインド  
させてペニスに  
渾身のサーピスをし、  
全力で性器を締め付ける。

その健気さと可憐さ、そして卑猥さに、  
男達はあつという間に快樂の極みに  
登り詰めた。






デカントと口を犯す男の精液を、  
リセットはその小さな体で  
しっかりと飲み干そうと頑張っている。  
だが、入りきらない分が滝のように溢れ出る。

ぐびゅぐびゅ  
ぐびゅぐびゅ






「はあっ、はあっ……」  
荒い息をつくりリセット。  
舌でのお掃除も終わり、  
次の利用者を待っている。

デカントはまだ犯りたりないようだ。  
カラーの美少女とセックスできるチャンスなど  
二度とあるものではないからこそ、執着しているのだろう。  
明日も、その次も、またその次の日も……  
リセットの淫猥な幽閉生活はまだまだ続きそうだ。





リセットが魔軍に捕らえられてから  
もう2ヶ月が経つ。  
本来成人男性とすら  
性交が厳しいような  
きわめて小さい体格の彼女だが、  
魔物の獣欲はお構いなしに  
浴びせられ続け、  
凌辱者をより気持ちよくさせるために  
あらゆる手段が講じられた。

その可憐な外見はそのままに、  
媚薬で調教され、全穴が使えるように  
訓練させられ、  
人外サイズのペニスが根元まで入るように、  
腹の中を手術までされている。



「いれる……ちんぽ……  
ちびにちんぽいれるううっ!!!」  
デカントのペニスが、  
リセットの膣に一気に突き入れられる。

哀れなカラーの少女は  
入った瞬間白目を剥き、  
奥歯が砕けんばかりに  
歯を食いしばる。

何度か経験した  
臨月のときよりもさらに  
大きく腹が膨らむ。

拡張感。圧迫感。死が間近に見えるような衝撃。  
だが、それに合わせて改造された膣と内臓は、  
しっかりとデカントのものをくわえこみ、締め付ける。




「ふんこらやっでんずこすこすするよ、  
きもちいんだあっ○○○○」

デカントのペニスで  
人工的に拡張された膣内と子宮内を  
ゴガンゴガンという音さえ感じるほどに  
凌辱されるリセット。

脳神経がおかしくなるほどの媚薬までもが  
毎日投与されつづけているため、  
酷い苦痛を快楽と誤認識しつつ、  
無惨な叫びを上げる。

「わ、わたしもっ、気持ち、いいよおっ!!」





「ん、んちゅ：はむ：っ」  
リセットは差し出された  
男のモノに  
小さい唇を上手に使って  
懸命に奉仕する。  
生来の真面目な性格が幸いし、  
これ以上ないくらいこの  
テクニシャンとなった  
彼女は、とらえた穴奴隷の中でも  
相当の人気だ。

デカントもゴスゴスと  
彼女の小さい身体全てを  
絶妙な締め付けに喘ぎながら犯している。  
平らな胸、小さい手足、可愛い顔、そして  
いやらしすぎる性器のギャップがたまらない。



絶頂が近づいている。  
リセットも、回を犯す  
男も、そして後ろの  
デカントも。

薬で判断力が狂っている  
リセットは、  
凌辱者達を喜ばせようと、  
激しく頭をグライインド  
させてペニスに  
渾身のサーピスをし、  
全力で性器を締め付ける。

その健気さと可憐さ、そして卑猥さに、  
男達はあつという間に快樂の極みに  
登り詰めた。




デカントと口を犯す男の精液を、  
リセットはその小さな体で  
しっかりと飲み干そうと頑張っている。  
だが、入りきらない分が滝のように溢れ出る。

ふふふふふふ  
ふふふふふふ







「はあっ、はあっ……」  
荒い息をつくりリセット。  
舌でのお掃除も終わり、  
次の利用者を待っている。

デカントはまだ犯りたりないようだ。  
カラーの美少女とセックスできるチャンスなど  
二度とあるものではないからこそ、執着しているのだろう。  
明日も、その次も、またその次の日も……  
リセットの淫猥な幽閉生活はまだまだ続きそうだ。



凌辱用の専用台に、  
手足を拘束されたりリセット。

今日もまた延々と3つの穴を  
犯され続けている。

「んっ、んむっ、ぶっ……」

男達は壊れるギリギリの所で  
遠慮なく彼女の小さい身体を  
愛用し、リセットは  
犯される悦楽の虜に  
なり果てていた。





「んっ…いっくっ、  
いきまひゅっ…」

男達のピストンに  
耐えかねて、リセットが  
その小さな体を  
痙攣させて絶頂する。

「なんでお前が楽しんでんだよ、  
肉穴の分際で生意気だぞ…!」  
男達はにやにやしながらそう言うと、  
ピストン運動を一斉に加速する。



リセットの粘膜すべてを  
焼き尽くすようにして、  
熱いザーメンの滝が  
彼女の体内を激しく  
駆け巡る。

ぐびゅっ…  
ぶびゅるっ…





「かつ、かひゅっ、  
かはあつ……」  
荒い息をつくりリセット。  
その可愛いからは  
量穴からザトメンがドロリと  
滴り、顔も精液まみれだ。

「あー最高に気持ちよかったぜ、  
リセットちゃんよ！」  
「でも自分だけ先にイッたお仕置きは  
しねえとな？」







男がリセットの細い首に巻いた紐を左右に引っ張っている。呼吸がままならずもがき苦しむが、手を固定されているため抵抗らしい抵抗は何一つできないリセット。

「……ッ！  
く、く……」



「……………」  
リセットが意識を失う。  
とたんに弛緩した膣と  
肛門から、さらに精液が  
どぼり、と出てくる。

その無惨な様子を見て、  
ますます欲情を滾らせる  
男達。デカイのをぶち込んで  
叩き起こしてやるわ。  
全員がそんなことを考えていた。





凌辱用の専用台に、  
手足を拘束されたりリセット。

今日もまた延々と3つの穴を  
犯され続けている。

「んっ、んむっ、ぶっ……」

男達は壊れるギリギリの所で  
遠慮なく彼女の小さい身体を  
愛用し、リセットは  
犯される悦楽の虜に  
なり果てていた。





「んっ…いっくっ、  
いきまひゅっ…」

男達のピストンに  
耐えかねて、リセットが  
その小さな体を  
痙攣させて絶頂する。

「なんでお前が楽しんでんだよ、  
肉穴の分際で生意気だぞ…!」  
男達はにやにやしながらそう言うと、  
ピストン運動を一斉に加速する。



リセットの粘膜すべてを  
焼き尽くすようにして、  
熱いザーメンの滝が  
彼女の体内を激しく  
駆け巡る。

ぐびゅっ…  
ぶびゅるっ…





「かつ、かひゅっ、  
かはあつ……」  
荒い息をつくりリセット。  
その可愛いからは  
量穴からザトメンがドロリと  
滴り、顔も精液まみれだ。

「あー最高に気持ちよかったぜ、  
リセットちゃんよ！」  
「でも自分だけ先にイッたお仕置きは  
しねえとな？」







男がリセットの細い首に巻いた紐を左右に引っ張っている。呼吸がままならずもがき苦しむが手を固定されているため抵抗らしい抵抗は何一つできないリセット。

「……ッ！  
くくく……」



「……………」  
リセットが意識を失う。  
とたんに弛緩した膣と  
肛門から、さらに精液が  
どぼり、と出てくる。

その無惨な様子を見て、  
ますます欲情を滾らせる  
男達。デカイのをぶち込んで  
叩き起こしてやろう。  
全員がそんなことを考えていた。







鬼畜戦士が世を駆け抜けてから幾星霜。  
過去の戦いも、人々の記憶も全てが神話の昔として語られるほどの  
年月が経っていた。

AI教という宗教団体がかつて存在したと言われる  
廃墟といよりもはや遺跡となった大神殿跡地の地下室で、  
考古学者達はありえないものを発見した。

密閉された玄室の中央、棺の上に横たわっていたものは――  
少女だ。全身の肌から金色の輝きをうつつすらと放ち、  
あまりにも美しいその顔、体、翼、光輪……

文字通り天上の美を目の前にして、学者たちの  
理性は瞬時に崩壊した。



すべすべとした滑らかな、磁器のような肌。  
可憐な乳首を先端に乗せた、控えめなふくらみ。  
純金で出来ているかの如き長い美しい髪。  
美に圧倒されつつも、  
気が付いた時には男は女神の足をつかみ、  
大きく広げていた。

「……うん……」  
深い深い、神代から続くのかと思わせるような  
眠りについていようだ。

男は時分でも戸惑うほどの欲情に慄きつつも、  
ある決断を下した。

これはおそらく古文書にある女神ALICEだ。  
遙か昔に滅んだはずの上位の神。



「今から、この女神を犯す」  
それが男の下した決断だった。

歴史学を志すものは何らかの形で歴史そのものに関わりたいとの強い気持ちを持っている。  
女神を犯すという形でこの世界の根幹に触れられるのならば、美しいメスを求めるオスとして、また自分の生き方からくる流れとして、極めて合理的な命の使い方と言えた。

伝承では太古の時代に神と呼ばれた者たちは、  
瞬きすらせず「思う」だけで  
人間を粉々にしてしまうという。

だが、この眠りの深さならばどんなことをしても目覚めまい。



「おおお……」  
下着を取り去り、人類の誰一人見たことがないであろう  
女神の性器を押し広げる。

色素の薄い陰唇は肌と同じように金色の光を  
うっすらとまとって、まるで宝石のようなきらめきを  
たたえている。

鼻を近づけて軽く匂いを嗅いでみると、  
本当にバラの花のような、艶やかかつ  
可憐な香りが漂っている。  
これが、女神の性器というものか。男は興奮を  
抑えることができない。





燃えるような視線が股間に集中してるのを  
感じるのか、それとも単純に寒いのか。

女神ALICEはうなされるように軽く身をよじる。  
困ったような表情になっても、本当にかわいらしい  
顔をしている。



「……んっ……」

我慢できずに、とうとう男は人差し指を女神の秘唇に挿し入れる。  
「……！」  
あり得ないほどの気持ちよさに、腰が砕けそうになる。

ほのかに暖かみを感じるその膣の感触は、まるで指が敏感な性器になっちゃったかのように、考えられないほどの快楽を与えてくる。微弱な電流が全身を回るように、触れ続けるのが苦痛なほどの心地よさ。



「んっ……んあっ……？」

もう男は性欲の暴走を止めることができず、押し広げた女神ALICEの性器を舐め始めてしまった。さすがに起きるかと思っただが、まだ眠っている。

極上の香氣と同じく、愛液の味もまたどこかさわやかで、柑橘類の果汁を思わせる。舌と小陰唇や大陰唇、そして膣肉や処女膜が触れ合う感触は、涙がでるほどに感動的なものだ。女神が相手のセックスは、これほどまでに甘美なものか。





処女の女神の濡れた性器と、  
ただの人間のペニスがかくっついていて、  
血が集まりすぎて鉄のようになり、  
人生で一番興奮している。

期待と興奮に胸とペニスを破裂寸前にしながら、  
男が本格的な「犯す体勢」を取っている。  
凌辱と処女喪失の危機を知らずに、  
女神ALICEは哀れにも、ただ眠り続ける。



つぶ、という感触と共に、  
龟头とALICEの性器が  
キスをする。

ペニスから全身へと燃え上がるような  
熱が走り抜け、  
男の体温を急上昇させるかのようだ。

「こんなにピンチなのに寝ちゃって…  
女神ALICEちゃん、かわいいなあ…  
いい？行くよ？俺のでかいおちんちんで、  
女神ちゃんのおま○こレイプしちゃうよ？」  
興奮のあまり、卑猥な言葉を口走る。だが、  
返事があるわけもない。

「……うん……」

今の寝言を合意の証と捉えることで、最後の一線、  
罪悪感にも片が付き、男は迷いなく、先走り液まみれの  
剛直で女神の性器を貫く。



「あっ……やっ……んんっ……！」  
わずかな痛みを感じるのか、子供がイヤイヤするように  
顔を左右に振りながら、女神はペニスをその清らかな体に受け入れていく。

「お……おお……気持ちよすぎる……」

男は女神の膣内にペニスをねじ込みながら、  
そのあまりの感触のすばらしさに感動の涙を流していた。  
意識が快樂のあまりに混濁し、心臓が爆発しそうなほどに激しく脈打つ。

ぐい、と腰を押し込むと、中で何か切れたような感触。  
ただの幸運なだけの人間が、女神の処女膜を破った瞬間だった。



「う、ううっ……うあっ……」  
女神が苦しそうにしている。

生まれて初めて知る性交の痛み。  
それをこの可愛らしい女神に味合わせているのが  
自分だという事に、男は興奮し、とうとう奥まで  
自分のペニスをねじ込んだ。

「っ……っ……！」  
一筋の鮮やかな赤い筋が、神と人の結合部から  
垂れてくる。

処女血だ。

これでこの女神は自分のものだ……

自分だけの……！男は遠慮なく、眠る女神相手に  
腰をたたきつけ始めた。



男の本気のピストンで、女神ALICEは涙を浮かべていた。目覚めたいだろうに、永遠に近いほど深い眠りがそれをゆるささないのだろう。

恐ろしいほどの勢いで、赤熱した鉄のようなペニスを何者の侵入も許したことのない聖地のような膣内へたたきつけられ、えぐられ、むさぼられている。

「し、死にそうなほど、気持ちいい……でも、もう限界だっ……！イクぞALICEっ……！！」

「う、うあっ……!？」

女神ALICEは涙をにじませながら、ただ凌辱されるがままだ。乱暴すぎるほどのピストン運動で打ちこまれる太い男性器に、彼女の柔らかかで繊細な肉ひだは、文字通り天上の快樂を男に与え続ける。



「射精るっ…!!受け止めるよALICE!!  
女神の膣に、中出しだあああっ!!」

「あっ、ふあっ、んんっ……!!」

「お、おおっ…やばい、無限に出るっ……」

だらしなく呆けた表情で、男は女神の膣内に、  
延々と精液を放出し続ける。  
数ある神の中でも超高位、魔王ですら  
まるで相手にならないほどの力を持つ、  
一級神の身体之最奥を、下等な人間の劣情で  
完膚なきまでに汚しきる。





「あう、ううう……！」  
女神が菌を食いしぼって苦痛に耐える。  
通常あり得ぬことだが、射精の勢いが壮絶すぎて、  
子宮の中にまで灼熱の精液が流れ込んでいるのだ。

「ぐ、ぐあああ……どこまで出るんだこれ……」  
男も快楽があまりに大きすぎて、苦痛なのか快感なのかの  
判断に困る状態に陥っている。  
しかし、腰をなおも力強く揺らし、高位存在の膣に、  
子種汁をびゅくびゅくと送り込み続ける。









だがそれを実行するまでのわずかな間に、男はさらに驚くべき暴挙に出た。後ろの穴、女神の尻穴に精液でぬめるペニスを強引に挿入したのだ。

強大すぎるほどの力も、意識が集中できなくてほ奮えない。困惑し狼狽する女神の表情を見つめつつ、括約筋の絶妙の締め付けを楽しみながら、男は根元までペニスをぶち入れ、ガスガスと犯し始める。

発掘隊の他のメンバーも完全に理性を失った状態で女神の肉体に殺到する。

不潔なペニスで可憐な唇が強引に割り開かれ、喉の奥まで犯される。

女神は焦っていた。力自体が消えたわけではないのに、なぜ抵抗がまったくできないのだろうか……？



「んんんっ、んああっ……!!」

男達が一斉に女神の肉体に射精する。  
快楽をむさぼるその必死な動きと、熱い精液の感触に、  
女神は望まぬ快楽を覚えている自分に気が付く。

いや「望まぬ快楽」ではない……  
寝ている間に散々嬲られたせいもあるだろうが、  
肉体が勝手に快楽を求めているのだ。







凄惨な凌辱の嵐は止むことを知らない。  
女神ALICEは遺跡発掘のチーム全員に、  
少なくとも百回以上は犯されているだろう。  
創造神によって作られた世界で最も美しい肉体が、  
世界最高の感度を持っていたことなど、女神ALICEにとっては  
完全に想像の埒外だった。

今や乱暴に突きこまれるペニスに悦び以外の何も感じず、  
自分から人間の肉棒を喜んでしゃぶり、  
自ら腰を振って前後の穴で精液を搾り取る。





皮肉にも、神として人類の魂を管理していた頃には  
決して味わえなかつた生きる実感に似たものが、  
それらの行為には確かにあった。

自分一人を置いて様変わりしてしまった世界で、  
新しい居場所と役割はこういったものになるのだろうか、と  
女神ALICEは予感していた。















































































